



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレ ター 第351号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン
ターニューズレター 第351号. 京大東アジアセンターニューズレター
2011, 351

ISSUE DATE:

2011-01-17

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134594>

RIGHT:

目次

- 「中国経済研究会」のお知らせ
- ダラムサラ近況と私見
- 中国の天災・人災・事故など : 2010年12月
- ダラムサラにおける現地人と外来難民との矛盾
- 【中国経済最新統計】

「中国経済研究会」のお知らせ

2010 年度第 9 回（通算第 16 回）中国経済研究会を下記の内容で開催することになりました。多くの方のご参加をお待ちしております。

記

時 間 : 2011 年 1 月 18 日(火) 16:30-18:00
場 所 : 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 3 階第 3 教室
報告者 : 馬相東（北京大学国際経済研究所副所長・京大経済学研究科客員研究員）
テーマ : 「サービス貿易と低炭素経済：日本の経験と中国の発展」

講師略歴：

1976 年湖南省生まれ。2009 年に北京大学より経済学博士学位取得。2007 年 5 月、2007 年 9 月-2008 年 8 月と 2008 年 11 月、それぞれ東京大学、米オハイオ大学、米コーネル大学で留学。現在、北京大学国際経済研究所副所長、京都大学経済学研究科客員研究員。主要研究領域：国際貿易理論と政策、国際政治経済学。

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第 3 火曜日に行います。2010 年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4 月 20 日（火）、5 月 18 日（火）、6 月 15 日（火）、7 月 6 日(火)、7 月 20 日（火）

後期：10 月 23 日（土）、11 月 9 日（火）、12 月 14 日（火）、1 月 18 日（火）

（この件に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

ダラムサラ近況と私見

11. JAN. 11

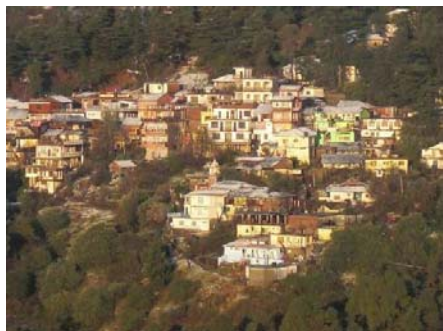
中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員(協力会理事)
小島正憲

《目次》

1. ダラムサラにチベット人難民はいなかった。 2. 中国・米国・インドなどに振り回された亡命チベット人たち。
3. 亡命チベット人の本心。 4. チベット暴動の真因とチベット族の未来。 5. ダラムサラ近辺は歴史の宝庫。

1. ダラムサラにチベット人難民はいなかった。

私は、つい最近まで、亡命チベット人たちはダラムサラというインドの僻地で、難民同様の苦しい生活を強いられていると思っていた。しかし今回、実際にダラムサラを訪れてみて、そこで私が目にしたのは、亡命チベット人たちが優雅に暮らしている様子と、それとは対称的に、スラム街で惨めなテント生活をしている現地のインド人の姿であった。



《山腹に建ち並ぶチベット人の邸宅》



《山裾のインド人スラム街テント》



ダラムサラはインド北部のヒマチャルプラデシュ州カングラにある。もともとダラムサラは、インド人ヒンズー教徒の巡礼地であり観光地であった。山腹に小さなきれいな滝があり、その脇にヒンズー教の寺院も建っている。ここに現在でも多くのインド人が参拝に集まってくる。そこではヒマラヤ山脈の絶景を望むことができ、小さな湖でボートを浮かべて遊ぶこともできる。1849年、英国軍人マックロードが閑静なその地を見つけ、山腹に別荘やこじんまりとしたキリスト教会を建て、避暑地として整備した。それ以降、この山腹の地はマックロード・ガンズーと呼ばれるようになった。山の麓にはインド人が多く

住み着いた。ダラムサラという地名はその両方を指す。1947年、インドが英国から独立し、英国軍人たちはこの地から姿を消した。

そこに1959年ダライ・ラマと共に、チベット人が突如としてやってきたのである。その当時のインドの宰相ネルはダラムサラの英国人別荘地跡が閑静であり、チベット人が住むのに最適であるという理由で、チベット難民にこの地に居住する許可を与えた。このときのことを土地のインド人古老は、私に、「ネルがチベット人に金銀でこの地を売ったのだ」と、いまいましうに語った。現在、ダラムサラには、約25000人が住んでおり、そのうち8000人(僧は1500人)がチベット人で山腹のマックロード・ガンズーを中心に住んでおり、17000人のインド人が山裾を中心に住み着いている。

マックロード・ガンズーにはレンガ造りの2～3階建ての亡命チベット人が住む瀟洒な家が建ち並んでいる。私が訪れたときは、ちょうど前日から雪が降っており、それらの家の屋上やベランダで、チベット人の子供が楽しそうに雪で遊ぶ姿を見ることができた。山裾の谷間では、インド人たちの一部がテント生活をしている。私はまさにそこに難民生活を見る思いであった。他のインド人たちも、おおむねトタン屋根の平屋に住んでいる。これらの住環境を見るだけで、亡命チベット人と現地インド人の間に大きな格差があることがわかる。

ダラムサラにあるラマ教の寺院を数か所訪ねてみたが、どこも新築で明るくきわめて清潔であった。そのほとんどが床は板張りであり、靴を脱いで拝観するようになっていたが、びかびかに磨かれていたので、靴下で歩いてもまったく抵抗はなかった。中国国内のラマ教寺院のほとんどが土足で、しかも薄暗く不潔感がすることを思うと、そこに大きな差を感じた。ある寺院内できれいな宿舎をみつけたので、その玄関口に回ってみると、そこには「2010年に寄付で建築」と書かれた銘板が埋め込まれていた。あるラマ教寺院の庭では、インド人が箒で丁寧に掃除をしている姿を目にした。また別の寺院では、インド人女性たちが頭の上にたくさん荷物を載せて運んでいるのを見た。ダラムサラで3Kの仕事に従事しているのはインド人である。

マックロード・ガンズーには、チベット人経営の土産物やインターネットカフェ、レストランなどが多く立ち並んでいる。ホテルも100軒ほどあり、チベット資本のものも多いという。マッサージ店も10店ほどあった。外貨交換所も多く、ラマ僧たちがドルをルピーに交換している姿をよく見かけた。インターネットカフェでは若いラマ僧がチャットを楽しんでいたし、街頭ではよく太ったチベット人やラマ僧がここかしこで談笑していた。狭い道にチベット人が運転する車が溢れていた。

亡命チベット人たちのこのような生活は、ダラムサラに世界中から寄付金がたくさん集まってきており、それが亡命チベット人たちの懐をうるおしているから可能なのである。そうでなければ亡命チベット人たちが、このような優雅な暮らしを満喫できるはずがない。

地元インド人の亡命チベット人に対する感情は、「好



悪」が半々である。土産物屋や観光運転手などをしているインド人は、亡命チベット人の存在を歓迎しているが、それでもこれ以上増えるのは困るという。亡命チベット人の犯罪なども多くなっているためであるという。また反対派は、ダラムサラはダライ・ラマの住む地として有名となり観光地化しているが、実際の外国人観光客は25%ほどであり、インド人観光客が75%である。したがってチベット人がいなくなっても、インド人用観光地として十分やっていける。やがてインド経済が発展すれば、もっとインド人観光客が増える。だからチベット人に早くこの地から去って欲しいという。

《チベット人宅のベランダから見た雪山の絶景》

《ダライ・ラマ邸の前で》

いずれにせよダラムサラで、チベット人の難民生活をみることはできない。少し大げさではあるが、「ダラムサラは亡命チベット人難民貴族の桃源郷と化している」と、表現することもできる。この1面を報じないマスコミやジャーナリストの罪は大きい。

2. 中国・米国・インドなどに振り回された亡命チベット人たち。

1949年、中国共産党は労働者や農民が主人公である中華人民共和国を建国した。そしてその理念を掲げて、共産主義国家の建設に邁進した。当時、チベット社会は農奴制を遺した制度を固持していたため、中国共産党はチベットに農奴の解放と社会改革を強く迫った。ダライ・ラマ14世を中心とする高僧や貴族、農奴主などの旧チベット支配勢力は、中国共産党の武力を伴う社会改革に武装反抗を試みたが、1959年、劣勢を悟り、再帰を誓ってインドに亡命した。

このとき米国は CIA などを使って、亡命の手助けをした。その後、亡命チベット人たちはインド政府の支援を受け、ダラムサラに定着した。もちろん米国もインドも、亡命チベット人を人道的に支援する反面、ともに彼らを対中国戦略のカードに使う算段であった。その後、米国は「中国封じ込め政策」の一環として、インドは国境紛争などの際に、適宜彼らを、人権問題などを口実にして中国を攻撃する道具に使ってきた。

それらの狭間に落ち込んだダライ・ラマ14世を中心とする亡命チベット人たちは、世界各国からの善意の寄付金を受けながら、結局、チベットへの反攻もできずじまいで、50年間の歳月をダラムサラで無為に過ごしてしまったのである。

半世紀にわたるこの歳月は、チベットに大勢の漢族企業家などの進出を許し、そこに新たな経済的・政治的・宗教的支配体制を完成させ、50年前の社会矛盾とは違う形の、漢族経営者とチベット族労働者という新たな構図の矛盾を生起させてしまった。したがって亡命チベット人が回帰しても、すでにチベットには過去の姿はなく、彼らには入り込む隙間がなくなってしまうのが現状である。ダラムサラでも亡命チベット人1世の時代は過ぎ去って、彼らの子や孫の世代となり、彼らはその地に安住し、必ずしも当初の目論見のチベット反攻を目的とは掲げなくなってしまう。

3. 亡命チベット人の本心。

現在、ダラムサラに居住している亡命チベット人たちは、すでに本心からチベット反攻を企図している者は少ないと、私は見る。また彼らにチベットへ帰って、現在以上の生活ができるという保証はどこにもない。どっぷり寄付金生活に浸かった亡命チベット人難民貴族に、チベットへ帰り、漢族との間で激しいビジネスや出世競争をする気はないだろう。

亡命チベット人たちは、ダラムサラから全インドや、世界へ拡散していつている。その数はすでに10万人以上であるという。今でも中国本土から難民としてダラムサラへ流れ込み、そして全世界に散らばっていくチベット人がいる。その方がチベット族若者たちにとっては得策なのかもしれない。

私は、ダラムサラのノル布林カで英語を流暢に話すチベット人の若者たちに出会った。彼らはすでに米国のグリーンカードを取得し、米国に居住しており、故郷のダラムサラへ里帰りしているところであるといい、まさに彼らは青春を謳歌している風情であった。またダラムサラからの帰路、チベットから来たというラマ僧のグループに会った。彼らは北京でインドの入国ビザを取得し、北京から飛行機でデリーへ来て、車でダラムサラへ行ったという。そしてまたチベットへ帰るのだという。今や、ラマ僧でさえ、ダラムサラへの出入りが自由なのである。つまり亡命さえも自由であることになる。

ダライ・ラマ14世は、高度な自治がかなえられるのならば、チベットに帰還してもよいと公言しているが、亡命チベット人の多くは本心では帰りたくないのではないかと思う。彼らにとってダライ・ラマ14世は広告塔であり、彼がいなくなれば寄付金は激減し、難民基地は消滅する。したがってダライ・ラマ14世の帰国については、そのアドバルーンは上げるが、実際には駆け引きだけに終わるだろう。またダライ・ラマ14世の生存中に、次期ダライ・ラマを選出しようという動きやダライ・ラマ14世に集中している権限を分散させようとする意図もあるようだが、大きな変更はされないに違いない。

4. チベット暴動の真因とチベット族の未来。

ダライ・ラマ14世がインドに亡命してから、すでに半世紀が過ぎ去った。その間に、チベット側でもダラムサラ側でも過去の歴史的経緯からは、隔絶された新たな社会と矛盾が生起している。したがって今やチベット問題の解決は、そ

の過去とは一定の距離をおいて、現実を直視し解決の糸口を探すべきである。

2008年のチベット暴動も、それはダラムサラからの反攻の烽火ではなく、チベット自体の新たな矛盾がその真因であり、チベット族の過去とは切り離して考えるべきである。暴動の真因は、漢族の企業家の進出によるチベット族労働者の不平不満の累積である。それは民族矛盾に、新たにより大きな階級矛盾が加わった結果、生じてきたものである。彼らの過去の物語は、そのきっかけを作ったにすぎない。あの暴動は、まずチベット族の漢族企業や商店などへの破壊・略奪・暴行があり、それに対して政府が武装警察や軍を投入して大弾圧をしたのである。この経過は、大木崇氏が「実録 チベット暴動」(かもがわ出版)で、その実体験を詳しく書いているし、私もそれを2度にわたり現地で確認してきた。それは日本のマスコミなどが声高に叫んでいる「中国政府の一方的なチベット族の弾圧」ではなかったのである。

もちろん私は、中国政府の血の大弾圧を肯定するものではない。しかしながらチベット族が暴力手段に訴えなければ、血の大弾圧はなかったことも事実である。いかなる場合でも絶対に暴力を振るってはならない。それは悲惨な結果に終わるだけである。チベット族は自重して、自助努力をするべきである。不平不満をならしていても、なにも解決はしない。漢族をしのぐ努力をすべきである。これはウイグル族にも共通する課題である。

この点で、チベット族やウイグル族などに、絶好の手本となる少数民族がある。それは朝鮮族である。中国東北部の北朝鮮との国境沿い多く住む朝鮮族は、ビジネスも同地周辺の漢族より上手であり、同時に知的水準も漢族より高い。吉林省延辺朝鮮族自治州琿春市にある私の独資企業も、総経理以下の主要幹部は朝鮮族である。なぜなら彼らの商売の才覚は高く、同時に漢語・日本語・英語・朝鮮語の4か国語を上手に話す人が多く、きわめて有能だからである。一般に延辺州に住む朝鮮族は漢族より裕福でもある。韓国や日本に出稼ぎに行き、帰って来た人も多く、国際感覚も豊かである。もちろん朝鮮族も幾多の逆境を乗り越え、歯を食いしばって努力をしてきたからこそ、今日の地位を築くことができたのである。これらの朝鮮族にも漢族に対する不満がないわけではないが、暴動を起こし漢族の支配をひっくり返そうなどという気はない。これらの朝鮮族の生き方を、チベット族やウイグル族は多いに学ぶべきである。「驕れる人も久しからず」の言葉のように、漢族の天下も長くは続かない。やがて漢族の勢力が後退するときに必ず来る。そのときチベット族の上に晴天が訪れる。そのときまで、チベット族は臥薪嘗胆し、自らを磨くべきである。

日本人としての私たちの課題は、いたずらに中国政府の少数民族政策を責め立てるのではなくて、現状を正しく認識して、チベット人企業家の育成のために助力し、深遠なチベット哲学や文化の普及を支援することであると考える。

5. ダラムサラ近辺は歴史の宝庫。

今回私は京都大学経済学部大西広教授といっしょに、イスラマバード → ラホール → ワガ国境 → アリムトサル → ダラムサラ → チャンディガール → デリー という行程で、ダラムサラに行ってきた。通過したそれらの諸都市はすべてが歴史の宝庫であった。つまり亡命チベット人たちが追いやられたダラムサラの地は、前人未踏の僻地ではなく、その近辺は古くから歴史に登場していた場所であったのである。

まず私たちはパキスタンのイスラマバードへ着き、そこから陸路を取りラホールに向かった。その途中で、アレキサンダー大王の東征中の最後の戦いの地を見ることができる。紀元前326年の「ヒュダスぺス河畔の戦い」である。アレキサンダー大王がパンジャブ州の王の象の部隊と始めて戦ったときの話を、パキスタン人のガイドから聞きながら、私たちはその河を渡った。そこにはその当時から伝わるという世界最大の岩塩鉱山もある。

次いでムガル帝国の中心都市のラホールに入る。ここにはムガル帝国の遺跡が数多く遺されている。アクバル大帝を始めとするムガルの皇帝たちは、領地であるアフガニスタンのカブールとインドのデリーを往復するときに、必ずこの地を通り、しばし逗留したという。外敵からこの地を守るラホール・フォートという城塞がしっかり遺されており、城中にはタージマハールを造ったシャー・ジャハンの宮殿も保存されている。そこは自然の風と噴水を上手に組み合わせ、涼風が部屋に吹き込むように工夫されている部屋や、天井や壁に鏡が埋め込まれ、月明かりが幻想的な雰囲気醸し出すように仕組まれた部屋などがある。また皇帝たちがこの地域の住民から直接、その意見を聞いたという広場もある。



市の中心部にあるラホール博物館はガンダーラ美術の宝庫である。それを見て回るにはたっぷり半日はかかる。圧巻は断食修行中の仏陀の像である。そのあばら骨が浮き上がった像には鬼気迫るものがある。私は以前から、この仏像？が大好きであり、インド旅行中に小さな木像を買い求め、自室に飾り、今でも毎日それをながめている。今回、その仏像のオリジナルを見ることができ、大感激した。

パキスタンとインドの国境であるワガ国境はおもしろかった。ワガはパキスタンとインドの最大の道路国境で、ここでは毎夕、同時にそれぞれの国旗の後納の儀式があり、そのときワガ国境の両側に、両国の人民がたくさん集まり、両国の応援合戦を行う。

両国には、そのための応援席が設けられている。そのときそこは30分間ほど、数千人の



応援団のものすごい熱狂に包まれる。当日、私はパキスタン側の席に座って応援した。イスラム教の国であるため男女の応援席が別になっていたので、当然のことながら私は男性席に座り、道路を挟んで反対側の女性席をみつめながら応援することになった。そこで私が見たものは、日頃、敬虔でベールで身を隠し、人前で大声を出すことなどないと思われていたイスラム女性たちが、熱狂的に諸手を突き上げ、雄叫びをあげ続ける姿だった。

パンジャブ州は1947年に、ワガ国境で2分された。したがってパキスタン側にもインド側にも同名の州がある。インド側に入ってすぐに、アリムトサルという街がある。ここはシーク教徒の聖地であり、黄金寺院がある。残念ながら今回は、時間の関係でここには行けなかったが、ぜひ訪ね勉強してみたい場所である。このアリムトサルから車で東北へ6時間ほど走ったところに、ダラムサラがある。

ダラムサラから車で8時間ほど南下したところに、チャンディガールがある。途中に英国統治時代の巨大な城塞がある。チャンディガールは、パンジャブ、ハリヤーナーという二つの州の州都を兼ねるという奇妙な因縁を持つ街である。この街は、インドにとってパキスタンとの戦略上の重要な拠点であり、その意味で、独立後早期に都市計画が実施され、街が整備された。インド人はチャンディガールをインドでもっとも美しい都市と讃えているという。確かに道路は広く、建物も近代的なものが多かった。

チャンディガールから列車に乗って、6時間でデリーへ着いた。

以上

中国の天災・人災・事故など : 2010年12月

14. JAN. 11

中小企業家同友会上海倶楽部代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事)

小島正憲

1. は実地検証済み。2. 以下は未検証、情報のみ。

1. 12/05、湖北省黄石市の湖北新冶鋼有限公司の工場内で火災発生。1名死亡。

- 工場内で作業中の従業員がタバコを吸い、投げ捨てた吸い殻が側にいた人の衣服に付いていた液体酸素に燃え移った。その後、火災となり、工場内には爆発の可能性のある物が多いため、工場周辺の住民約2000人が避難。12/7朝、立ち入り禁止区域が解除。住民は自宅に戻る。
- 住民の避難は、区民委員会が率先して指導。避難場所や食事の手配なども行う。会社側はなんらの支援もせず。一時、一部の住民が怒って抗議行動を行い、工場に出入りするトラックなどの妨害をした。その後は沈静化。この工場周辺は道路も狭く、その上、住居などの間を多数の工業用パイプが張り巡らせており、従来から危険視されていた。住民たちの間からは、移転要求が出ていた。
- 湖北新冶鋼有限公司は中信泰富公司(香港の中信集団が大株主)の子会社。中信泰富公司は2008年決算で約120億円の赤字を計上。豪州鉱山への投資、為替運用に失敗したため。



2. 11/30、広東省の新塘镇大敦村で重度の環境汚染。

- 新塘镇はジーンズの世界的生産基地であり、ジーンズ工場が立ち並んでおり、その排水が周辺の河を汚染していると民間調査組織が告発。カドミウムが標準の126倍、検出されたという。

3. 12/04深夜、貴州省凱里市のインターネットカフェで爆発全壊、火災発生。7人死亡、37人負傷。

- 爆発した貸し部屋の隣から、爆発物の破片などが回収されており、インターネットカフェの経営者らが管理責任を問われている。当時このカフェには45人ほどがおり、ほぼ全員が被害にあった。犠牲者は若者がほとんどで、若者がカフェに入り浸る悪しき社会現象が浮き彫りにされた。

4. 12/05正午ごろ、四川省甘孜チベット族自治州道孚県で草原火災。22人死亡。

- 人民解放軍が消防と人命救助に当たったが、火勢強く、なかなか消し止められなかった。解放軍兵士15人、現地住民5人、林業従事者2人が犠牲となる。

5. 12/07、貴州省遵義市紅花崗区長征鎮坪豊村で、崖崩れのためマンション半壊。

- 崖崩れで2階建てのビルは完全に埋まり、隣の11階建てのマンションが半壊。マンション住民800人は、通行人の通報により、10分ほど前に避難したため、負傷者なし。

6. 12/07夜、河南省三門峽市澠池県の河南義馬炭鉱集団巨源炭鉱でガス漏れ事故発生。26人が死亡。

- ・地元当局がただちに救出活動を行ったが、この炭鉱には坑内地図もなく、鉱夫から聞き取り調査をして地図を急作成し救出活動に当たった。また坑内に残された鉱夫の人数もはっきりせず、救出活動が遅れた。なおこの炭鉱は老朽化しており、近く廃坑にする予定になっていたという。

7. 12/08、山東省聊城市陽谷県の山東中石薬業公司以貯蔵タンク爆発。

- ・アルコールや溶剤などの貯蔵タンクが、朝5時ごろ爆発炎上、夕方6時ごろに鎮火。従業員1人が大腿部骨折、6人が軽いケガ。一時、この企業の従業員と周辺9村の住民8000人が避難。

8. 12/09、大連市の大連海洋大学付近の防波堤が大波で倒壊。

- ・全長200mの防波堤はそのほとんどが、4～5mの大波で倒壊。老朽化や地盤の緩みが原因と見られている。

9. 12/14午前9時ごろ、広東省深圳市の地下鉄1号線国貿駅構内でエスカレーターが逆走、24人が負傷。

- ・ラッシュアワー時で、同エスカレーターには70～80人ほどが乗っていた。突然、急速度で逆走したので、全員が相次ぎ転倒。負傷者は24人、原因は不明。

10. 12/17から6日間連続で、甘肅省蘭州市に汚染警報発令。

- ・この6日間、蘭州市内は終日、空気汚染がひどく街中に霧が立ちこめたような状況であった。蘭州市政府は冬季大気汚染緊急警報を発令し、街のすべてのバーベキュー屋台を営業停止にし、市民やサービス業の石炭ストーブを使用禁止、排気基準を超える車の運行禁止、石炭ボイラーを使用する工場には環境保護基準を徹底、すべての建築現場では防塵対策を講じさせ、立ち退きなどの工事は一時停止させた。

11. 12/18午前7時ごろ、浙江省平湖市近郊の華辰能源有限公司でプロピレン貯蔵タンク爆発炎上。

- ・45台の消防車が出動。火は2時間後に鎮火。死傷者不明。

12. 12/20、中国国家電網公司是石炭不足のため、電力使用規制発表。

- ・大雪で各地の交通が麻痺しているため、発電用の石炭の供給が間に合わず、深刻な電力不足に陥る可能性のある地域に電力使用規制を発表した。今回の石炭不足を、政府が進めている中小零細炭鉱の整理政策に問題があると指摘する声もある。

13. 12/23深夜、寧夏回族自治区中衛市中寧県の寧夏天元鋳業有限公司でガス漏れ、3人死亡、21人ガス中毒。

- ・工場内の化学反応工程で、ガス漏れ事故が起き、従業員24人が中毒症状を起こす。3人が死亡。工場側の説明では硫化水素が漏れた疑いが強い。近所では日常的に悪臭がただよっており、地元住民は困っていたという。この企業は世界でも最大規模の電解マンガン生産工場。

14. 12/25午後1時、江蘇省塩城市の朱瀝溝河で、運搬船が鉄橋に衝突、橋崩壊。

- ・石炭運搬船が鉄橋に衝突したため、橋が崩壊。この橋には、従前から船がよく衝突しており、この状態を放置しておいた地元当局に非難が集中している。この橋は兩岸住民の重要なライフラインとなっており、早急な復旧が求められている。

15. 12月、江西省九江市九龍村、水道水が茶褐色になる。

- ・村民によれば、数か月前から、村では水道水が茶褐色となりまったく飲めなくなったという。この村の水道企業は個人経営から政府へ、さらに個人へと3転しており、責任の主体があいまいになっているという。水道企業が経費節約のため、必要な浄化処理を行わっていない可能性が高い。加えて最近、水道代の値上げがあったばかりで、村民の怒りは収まらない。

16. 12月、河北省容城県沙河営村の農民、地下水汚染に抗議。

- ・この県には、大型製紙工場とシャツの大型生産工場があり、その工場排水で明らかに地下水が汚染されているという。村の用水路には、製紙工場や捺染工場から茶褐色の汚水が流れ込んでおり、農民たちはその水を利用して育てた作物は自らが口にせず、全て売りさばいてしまう。自家用には400～500mの深い井戸を掘って対応しているが、それでも安心できないという。

17. 12月、広東省で新たに17種の職業病が増加。

- ・広東省で開かれた職業病予防院開設50周年の祝賀会で、この12年の間に広東省では、新たに17種の職業病が出現したと報告された。その中でクロム鼻病と職業性メタノール中毒の2種類は、今年新たに判明したものである。具体的な患者数は公開されていないが、少なくとも数百万人の労働者がその病を患っており、しかし効果的な治療と賠償を受け取ることができていない状況である。

18. 12月、「果物・野菜洗浄器」の誇大宣伝がばれる。

- ・北京市で、「活性酸素技術応用、殺菌率99%、農薬分解率95%」とうたった「果物・野菜洗浄器」が、内部告発によって、誇大宣伝であることが判明した。最近、消費者の食品安全志向が高まったことによって、この種の商品が飛ぶように売れていたが、その効果は20%ほどしか期待できず、インチキ商品であることがわかった。むしろ悪い商品の中には、オゾンを生産させると同時に発ガン性物質を含む濃度の高い窒素酸化物を生産させるものもあり、多く吸いすぎると健康に害があるものもあるという。

以上

ダラムサラにおける現地人と外来難民との矛盾

京都大学大学院経済学研究科
教授 大西 広

はじめに

以前、この「ニュースレター」にネパールのチベット難民について小文を書いたことがあったが、インドにおけるチベット難民の中心地、ダライラマ亡命政府の存在するダラムサラに行ってきた。ダラムサラと聞くと、どうしても「亡命政府の本拠地」との印象が先立つが、ここはチベット難民が来る以前からの避暑地で、現在も 18000 人のインド人が暮らしている(これに対し現在のチベット人の人口は約 7000 である)。したがって、そこに以前から暮らすインド人にとってみれば、1959 年を境に「難民」が押し寄せるようになり、その後「共存」を余儀なくされるようになった。そして、その中で各種の問題が生じるようになった、となる。

現地インド人の激しい反発

そこでまず、ダラムサラの概況を説明すると、ここは大きく三つの地区によってなりたっていて、①山裾にある本来のダラムサラ、②山の上にチベット族が集住するマクロードガンジ地区、③その中間地帯となっており、①はノル布林カと呼ばれるチベット人の寺院・ショップ・ホテル複合施設を除けば基本的にインド人が住み、②はダライラマも住む両民族の混合地区、③はチベット亡命政府がある混合地区となっている。そして、問題は②③のような混合地区で起きている。私がドライバーとして雇った現地のインド人およびその通訳は口を揃えてチベット人への反発を次のように露わにした。すなわち、

- 1)治安が悪くなり、チベット人がインド人を殺害するような事件も生じた。さらに、チベット人はその犯人をかばって逃走させ、その犯人は今も捕まっていない。このようにチベット人は自分たちに犯罪者が出ておかばう。
- 2)知っている現地のチベット人僧侶をデリーでたまたま見かけたが、そこで彼はジーパン姿であった。僧侶は本来それを着られない。そのため、見つけた現地インド人を部屋に入れて酒を薦め、秘密にして欲しいと懇願された。また、インド人が「なぜダラムサラでは僧侶の恰好をしているのか」と聞いたところ「僧侶はビジネス、お金のため」と答えられたという。本来彼らは結婚もできないが、隠れて家族を持っている者もいるという。
- 3)インド政府がゴミ収集車を購入するお金をそれぞれのコミュニティに出したが、チベット人コミュニティは予定された車両を買わず、別目的に使った。それを指摘されると慌ててゴミ収集車を買った。
- 4)現地人が崇めるヒンズー教寺院先の綺麗な滝でチベット人は洗濯をして水を汚している。
- 5)チベット人に寄付した人がここに来た場合、醜聞を知られるのが怖いので地元インド人との接触を極力避けようとしている。

となる。これらは現地インド人が直接私に語ったことであるから本当のことであろう。そして、実際、このような摩擦のあることは、現地チベット政府高官も認めている。たとえば、藤倉善郎という記者が「オーマイニュース」というネット・ニュースに書いている「チベット流民主主義の一端を見た/全財産はたいてチベット亡命政府に行ってみた(最終回)」とのレポート(2008 年 8 月 28 日)では、元政治囚組織「グジュスム」のシガワン・ウォバル代表は「インド人の中では、チベット人に対してよくない感情を抱いている人もいます」と話している。私はダラムサラ訪問前にこのレポートを読んだ際、これを一般のインド人の感情かと勘違いをしていたが、実はこの意味はダラムサラに元から住んでいる現地インド人との間の矛盾であることが今回

分かった。

反発の背景にある経済格差

しかし、こうした一種の「チベット人の犯罪」が現地インド人の心の中に深く刻みこまれるのには、やはり経済上の格差が背景にあるものと思われる。ここは避暑地といってもインドの片田舎だから現地インド人は当然貧しい。たとえば現地のローカルバスに乗っているのはすべてインド人で、チベット人はバイクや車で移動していた。上記の藤倉善郎氏のレポートでも、「ダラムサラには多くの物乞いがいるが、すべてインド人だ」とのシガワン・ウォバル氏の言葉が照会されている。そうしたインド人から見た時、チベット難民の暮らしの良さは妬みの対象となっており、それは彼らの「経済活力」だけによるものではない。私も現地亡命政府のメンバーから資金援助の依頼を受けたが、世界では「チベット難民を救おう」ということになっているから、1人の子供に4人の後見人がつくこともあるなどと聞いた。道の片方は貧しいインド人の家、他方は豊かで綺麗なチベット人のアパートとなっているところも複数箇所見たが、特に僧侶は優遇されているようにも思われる。チェチョリン寺という僧院では、西洋人が寄付したバルコニー付きの綺麗なアパートがあった(写真)。



もちろん、ネパール難民と同じく、チベット人自身の正當な努力による豊かさもありそうである。私の泊まったホテル周辺にあった二箇所のネットカフェはどちらもチベット人経営によるもので、かつ非常に洒落た外国人好みのもになっていた。そして、そのどちらでも労働者としてインド人が雇われているのが気になった。もう一度先の藤森氏のレポートを引用すれば「チベット人は、汚い仕事をしがない。ダラムサラでも、飲食店の皿洗いなどはインド人にやらせている」となる。現地インド人からすれば、本来自分たちだけで静かに平和に暮らしていた町に急に

彼らがやってきて、自分たちを見下す存在となっている。それが「難民」というステータスで、かつまた外国からの大量の援助で暮らしている、となる。もちろん、土産物屋やレストランやホテルも競合し、彼らに顧客を奪われている。こうなると、ここでの摩擦は単に中国国内で生じているチベット族と漢族の間の摩擦である以上に、「外国からの援助」の絡んだ、さらに複雑な問題となっていることが分かる。

しかし、反発の度合いはそれぞれ

しかし、それでも、現地のインド人はすべてのチベット人を一様に嫌っているわけでもなく、また、すべての現地インド人がチベット人を嫌っているわけでもない。激しい反発の感情を示した我々のドライバーも、古くからここにいてインド人に雇用をもたらしてくれている者はいてもよい、と言っていた。上述のようなチベット人企業以外でも、お寺や亡命政府庁舎などで掃除などの仕事をする現地インド人がいた。彼ら/彼女らは「僕」の地位に押し下げられているが、それでも雇用を与えてくれるものは良い、ということとなる。町中でインタビューしたインド人タクシー・ドライバーも彼らが仕事をくれるのでOKと言っていた。ただし、このインタビューで通訳が「彼らがいなくともインド人だけで観光客は十分」「彼らがどんどん増えてインド人が少数派になってもいいのか」と聞くと、「それもそうだ・・・」となったが、である。インドも中国と同じく急成長の過程にあり、夏も冬もこの避暑地に来るインド人観光客は急増している。現在も彼らが8割方占めているが、今後はもっとそうなるであろう。ともかく、こうした経済的事情で現地インド人のチベット人への感情が左右されているということが重要である。

なお、この地のチベット人の半分はニューカマーだという。実際、チベット寺院経営のホテルの従業員やインド人地区でレストランを経営するニューカマーに会った。また、今回は亡命政府の元高官にも会ったが、その秘書もまた1997年に来たニューカマーであった。そして問題は、現地インド人に言わせる限り、ニューカマーの方が問題が多いということである。たとえば、ニューカマーの多くは現地語に疎く、インド人に仕事をくれるわけでもない。また、行儀も悪いと現地人は言う。私の理解では、異文化に接する機会が少なかったため、そうした理解が浅い、あるいは逆にそうしたチベット人がチベットを脱出してここに来ている可能性が高い。少なくとも、異民族と接する機会の多寡が偏見の有無を決めるということは中国国内でも見られることである。新疆でもチベットでも、新しく入ってくる漢族の方により問題が多いこと、「漢族の街」に化したウルムチに入ってくるウイグル族には民族交流の少ない南新疆の方がより問題の多いことが知られている。このことと同じ現象といえよう。

国際社会との関係

しかし、この問題がチベット難民にとって大きいのは、このニューカマーの多寡が中国国内と難民キャン

ブとの生活水準の高低と関わっており、その競争を中国政府と「国際社会」がしている格好となっているからである。余り知られていないことであるが、多くの難民は中国大使館でビザを取得して中国との出入国を繰り返しており、中国に帰国後定住している者もいる。また逆に、中国に定住しつつダラムサラを訪問するチベット人も多い。私もダラムサラを少し出た観光地でそうした数名の僧侶に会った。つまり、こうした人々はどちらを定住地とするか比較秤量をしているのである。そして、もしそうすると、それぞれの地での生活の良さが比較されるから、中国政府はチベットの生活水準の引き上げにやっきとなる。チベット自治区領内の地区総生産に匹敵するほどの額の中央政府からの財政補助は異常なものであり、その他、各生産単位での賃金水準も異常に高い。これは、客観的には世界各国の亡命政府支持勢力の支援金で得られているチベット難民の高い生活水準と競争していることとなる。

ついでに言うと、亡命政府から見た時、この生活水準を維持・向上させる最良の道は、事実か事実でないかに関わらず、チベット人がいかに可哀想かを国際社会に強調することにある。上で引用した藤森氏のレポートでも、亡命政府のンガワン・ウォバル代表自身が「チベット人の言うことを鵜呑みにしなくてもよい。中国側の言い分もしっかり聞いて、自分で判断して欲しい。」と述べているが、こうして亡命政府側自身が自分たちの宣伝にバイアスがかかっていることを認めている。なお、亡命政府が認めさえすれば、どんな人間も「難民」と認定され、ビザが不要となるので、チベット人の入国は非常に簡単であると現地インド人は言っていた。こうした事情も重要である。

ともかく、このように考えると、インド現地での摩擦はただインド国内の事情が影響しているというより、国際政治がどのように動いているかに大きな影響を受けていることが分かる。つまり、世界の亡命政府支持勢力も、そして中国政府もが気がつかないうちにインド国内の摩擦の大小に関わっていることになる。こうした事情を知っておくことは、「外国」のひとつである日本の国民にとっても重要なことと思われる。

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008 年												
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5 月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6 月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7 月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8 月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9 月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10 月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11 月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年												
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2 月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3 月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4 月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5 月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5
6 月	10.3	13.7	18.3	2.9	24.9	200	43.9	34.6	8.3	39.6	18.5	18.2
7 月		13.4	17.9	3.3	22.3	287	38.0	23.2	12.8	29.2	17.6	18.4
8 月		13.9	18.4	3.5	23.9	200	34.3	35.5	21.2	1.4	19.2	18.6
9 月	9.6	13.3	18.8	3.6	23.2	169	25.1	24.4	12.2	6.1	19.0	18.5
10 月		13.1	18.6	4.4	23.7	271	22.8	25.4	8.7	7.9	19.3	19.3

11 月		13.3	18.7	5.1	29.1	229	34.9	37.9	28.1	38.2	19.5	19.8
12 月						131	17.9	25.6			19.7	19.9

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、() 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。